三十年前の島田沼南

内田魯庵

青空文庫

島田沼南しまだしょうなんは大政治家として葬られた。清廉潔白百年稀まれに見る君子人として世を挙げて哀悼された。棺を蓋おほうて定まる批評は燦爛さんらんたる勲章よりもヨリ以上に沼南の一生の政治的功績を顕揚するに足るものがあつた。

沼南には最近十四、五年間会つた事がない。それ以前とて会えば寒暄かんけんを叙する位の面識で、私邸を訪問したのも二、三度しかなかった。シカモその二、三度も、待たされるのがイツモ三十分以上で、漸ようやく対座して十分かソコラで用談を済ますと直すぐ定きまつて、

「ドウゾ復またお閑ひまの時御ユツクリとお遊びにいらしつて下さい」と後日の再訪を求めて打切られるから、勢い即時いとまじに暇いとま乞こいせざるを得なくなつた。随したがつて会あえば万まんざら更さら路人ろじんのように扱あわれもしなかつたが、親しく口を利きいた正味の時間は前後合して二、十分ぐらいなもんだつたろう。

が、沼南の「復たドウゾ御ユツクリ」で巧みに撃退されたのは我々通り一遍の面識者ばかりじゃなかつた。沼南と仕事を侶ともにした提携者や門下生的関係ある昵じつきん近者じつきんさえが「復たユツクリ来給え」で碌ろくろく々用談も済まない中うちに撃退されてブツクサイうのは珍らしくなかつた。

もつと尤も沼南は極めて多忙で、地方の有志者などが頻ひんぱん繁ぱんに出入し

ていたから、我々閑人ひまじんにユツクリ坐り込まれるのは迷惑だったに違いない。かつ天下国家の大問題で充満する頭の中には我々閑人のノンキな空談を容れる余地はなかつたろうが、応酬に巧みな政客の常で誰にでも共鳴するかのよう^いに調子を合わせるから、イ気いちになつて知己を得たツモリで愚談を聴いてもらおうとすると、忽ち巧みに受流されて「復たおヒマの時に御ユツクリ」で撃退されてしまう。

由来我々筆舌の徒ほど始末の悪いものはない。談ずる処は多くは実務に縁の遠い無用の空想であつて、シカモ発言したら々びびとして尽きないから対手あいてになつていたら際限がない。沼南のような多忙な政治家が日に接せつ踵しょうする地方の有志家を撃退すると同じ

コツで我々閑人を遇するは決して無理はない。ブツクサイうものが誤つておる。

が、沼南の応対は普通の社交家の上ツ滑りのした如才なさ^{うわすべ}と違つて如何にも真率に打解けて対手を育服さした。いつもニコニコ笑顔^{えがお}を作つて僅か^{わず}二、三回の面識者をさえ百年の友であるかのやうに遇するから大抵なものはコロリと参つて知遇を得たかのやうに感激する。政治家や実業家には得てこういう人を外^そらさない共通の如才なさがあるものだが、世事に馴^なれない青年や先輩の恩顧に渴する不遇者は感激して忽ち腹心の門下や昵近の知友となつたツモりに独り^{ひと}で定めて^きしまつて同情や好意や推^{すい}輓^{ばん}や幹^{あつ}旋^{せん}を求めに行く^{あし}と案外^{そつ}素気なく待遇^{あし}われ、合力無心を乞う苦学生^{あし}の如く

に撃退されるので、昨の感激が消滅して幻滅を感じ、敵意を持たないまでも不満を抱き反感を持つようになる。沼南ばかりじゃない。

二

沼南は終始一貫清廉を立^{たて}通^{とお}した。少くも利権割取を政治家の余得として一進一退を総^{すべ}て金に換えて怪^{あやし}まない今の政界にあっては沼南は実に鶏^{けいぐん}群^{ぐん}の一鶴^{いつかく}であった。

が、清廉を看板にし売物にする結果が貧乏をミエにする奇妙な虚飾があつた。無論、沼南は金持ではなかつた。が、その社会的

位置に相応する堂々たる生活をしていたので、濁富でないまでも清貧を任ずるには余りブルジョア過ぎていた。それにもかかわらず、何かというとも必要もないのに貧乏を揮廻ふりまわしていた。

沼南が今の邸宅を新築した頃、偶然訪問して「大層立派な御普請が出来ました、」と挨拶あいさつすると、沼南は苦笑いして、「この家も建築中から抵当に入ってるんです」といった。何の必要もないのにそういう世帯の繰廻くりまわしを誰にでも吹聴ふいちようするのが沼南の一癖であった。その後沼南昵近のものに訊きくと、なるほど、抵当に入ってるのはホントウだが、これを抵当に取った債権者というは岳父がくふであったそうだ。

これも或る時、ドウはなしいう咄はなしの連続であったか忘れたが、例の通

り清貧咄をして「黒くとも米の飯を食し、綿布でも綿の入った着物を着ていれば僕はそれで満足している」と得々とくとくとしていった。沼南が平生綿服を着ているかドウかは知らぬが、その時の沼南はリュウとしたお召か何かでゾロツとしていたのだから挨拶に窮した。

その後、沼南昵近の或る男に会った時、その話をして、「何だつてアンナに貧乏ぶるんだろう、」というのと、

「アレは沼南の癖だよ、」といった。「ツイこの頃も社（毎日新聞社）で沼南が、何かの話のついでに僕はマダ抱え俵かかぐるまを置いた事がない、イツデモ辻俵で用を足すというんだ。沼南の金紋護謨ゴム輪わの抱え俵が社の前にチャンと待ってるんだからイイじゃないか。

社の者が沼南の俸を知らないとはマサカに思つてもいまいが、他の者が貧乏咄をすると自分も釣られて負けない氣になつてウツカリいつてしまふんだネ。お目出たい咄サ。こんな処はマア低能だネ。」

沼南の清貧咄は強ち貧乏を銜うためでもまた借金を申込まれるあなが防禦線ぼうぎよを張るためでもなかつたが、場合に由ると聴者よに悪感を抱かせた。その頃毎日新聞社に籍を置いたG・Yという男が或る時、来て話した。「僕は社の会計から煙草錢ぐらい融通する事はあるが、個人としての沼南には一錢だつて借りた覚えがない。ところがこの頃退引のつびきならぬ事情があつて沼南に相談すると、君の事情には同情するが金があればいいがネ、と袂たもとから薑口がまぐちを出

して逆さに振つて見せて、「ない、同情するには同情するが生あいに憎く僕にも金がない」という、こういう挨拶だ。貸す気がないなら貸さんでもいい、無理に借りようとはいわない。何も同情呼ばわりして逆さに墓口を振つて見せなくても宜よかろう、」と、ブン怒おこつて沼南を罵倒ばとうした事があつた。

その頃の新聞社はドコも貧乏していた。とりわけ毎日新聞社は最も逼ひっぱく迫して社員の給料が極めて少かつた。妻子を抱えているものは勿もちろん論だが、独身者すらも糊口ここうがし兼ねて社長の沼南に増給を哀願すると、「僕だつて社からは十五円しか貰もらわないよ」というのが定きまつた挨拶であつた。増給は魯おろか、ドンナ苦しい事情を打明けられても逆さに墓口を振つて見せるだけだ。「十五円であ

の生活が出来るかい。十五円はウソじやアあるまいが、沼南の収入は社の月給ばかりじやなからう。コッチは社から貰う外にどこからも金の入る道はないンだけ、」と、沼南に逆さに墓口を振って見せられた連中は沼南の口先きだけの同情をブツクサいつていた。

三

それでも当時の毎日新聞社にはマダ嚶鳴社おうめいしや以来の沼間ぬまの気風が残っていたから、当時の国士的記者気質かたぎから月給などは問題としないぼくたくで天下の木鐸ぼくたくの天職たのしを楽しんでいた。が、新たに入社する

ものはこの伝統の社風に同感するものでも、また必ずしも沼南の人物に推服するものばかりでもなかつたから、暫らくすると沼南の節度あきたに慊あきららないで社員は絶えず代謝して、解体前の数年間はシツキリなしにガタビシしていた。

なかんずく
就中、

社員が度々不平を鳴らし、かつ実際に困らせられたのは沼南の編輯方針が常にグラグラして朝令暮改少しも一定しない事だった。例えば甲の社員の提言を容れて直ぐ実行してくれと命じたものを乙の社員の意見でクルリと翻えして肝腎かんじんの提言者に通告もしないでやめてしまう。そんな事とは知らないから前に命ぜられた社員は着々進行して率いぎ実現しようとなると、「アレはやめにした、」とケロリと冷すました顔をしている。自分ばかり

が呆氣あつけに取られるだけなら我慢もなるが、社外の人に手数を掛けたり多少の骨折ほねおりをさせたりした事をお関かまいなしに破毀はきされてしまつては、中間に立つ社員は板挟いたばさみになつて窮してしまふ。あるいはまた、同じ仕事を甲にも乙にも丙にも一人々々に「君が適任だから骨を折つてくれ」と命ずる。自分だけが命ぜられたツモりで各々めいめい一生懸命になつて骨を折つてると、イツカ互どうしに同士どうし討ちしている事が解るから誰も皆厭氣いやきがさして手を引いてしまふ。手を引くばかりでなく反感を持つようになる。沼南統率下の毎日新聞社の末期が情氣満々として一人も本氣に働くものがなかつたのはこれがためであつた。

松隈内閣だか隈板内閣だかの組閣あたに方つて沼南が入閣するとい

う風説が立った時、毎日新聞社にかつて在籍して猫の目のようにクルクル変る沼南の朝令暮改に散三ツ原苦しまされた或る男は曰く、「沼南の大臣になるなら俺が第一番に反対運動する、国家の政治が沼南のお天気模様で毎日グラグラ変られて堪るもんかと。」

毎日新聞社が他へ譲り渡された時、世間では十日も前から噂があつたが、社員は燈台とうだい下暗もとくらしで、沼南の腹心はあるいは知っていたかも知らぬが、平の社員は受渡しの濟んだ当日になつても知らなかつた。中には薄々うすうす感づいて沼南の口占くちうらを引いて見たものもあつたが、その日になつても何とも沙汰さたがないので、一日社務に服して家へ帰ると、留守宅に社は解散したから明日から出

社に及ばないという葉書が届いているんだから呆氣あつけに取られてしまった。

いやしくも沼南は信誼しんぎを重んずる天下の士である。毎日新聞社は南風競きそわずして城を明渡さなくてはならなくなっても安い月給を甘んじて悪銭苦闘を続けて来た社員に一言の挨拶もなく解散するというのは嚶鳴社以来の伝統の遺風からいっても許しがたい事だし、自分の物だからといって多年辛苦を侶ともにした社員をスツポかして、タダの奉公人でも追出すような了りよう簡けんで葉書一枚で解職を通知したぎりすで冷ましているというは天下の国士を任ずる沼南にあるまじき不信であるというので、葉書一枚で馘かく首しゆされた社員は皆カンカンになって結束して沼南に迫った。その結果が沼南

のイツモ逆さに振つて見せる墓口から社を売つた身代金の幾分みのしろぎんを吐出はきだして目出たく無事に落着いたそうだ。そうかと思うと一方には、代がわりした『毎日新聞』の翌々日に載る沼南署名の訣けつべ別の辞のゲラ刷ずりを封入した自筆の手紙を友人に配っている。何人に配つたか知らぬが、僅わずかに数回の面識しかない浅い交際の私の許もとへまで遣よこしたのを見るとかなり多数の知人に配つたらしいが、新聞社を他へ譲ゆずりわた渡すの止むを得ない事情を縷々るると訴えたかなり長い手紙を印刷もせず代筆でもなく一々自筆で認したためて何十通（あるいはそれ以上）も配つたのは大抵じゃなかつたろう。平生の知己に対して進退行蔵こうぞうを公明にする態度は間然かんぜんする処なく、我々後進は余り鄭重ていちよう過ぎる通告に痛み入つたが、近い社員の

解職は一片の葉書の通告で済まし、遠い夕ダの知人には頗る慇懃な自筆の長手紙を配るといふ処に沼南の政治家的面目が仄々見える心地がする。

沼南の五十年の政治家生活が終に台閣の椅子を酬いられなかつたのは沼南の志が世俗の権勢でなかつたからばかりではない。アレだけの長い閱歴と、相当の識見を擁しながら次第に政友と離れて孤立し、頼みになる腹心も門下生もなく、末路寂寞として僅に廓清会長として最後の幕を閉じたのは啻に清廉や狷介が累いしたばかりでもなかつたろう。

四

沼南は 廃娼はいしやうを最後の使命たたかとして闘たたかった。が、若い時には相
 応せつかはんりゆうに折花攀柳せつかはんりゆうの風流に遊んだものだ。その時代の沼南の消息
 は易簣えきさいく当時多くの新聞に伝えられた。十年前だった、塚原
 靖む 島田三郎合訳と署した代数学だか幾何学だかを偶然或る古本
 屋で見附けた。余り 畑はたけ 違ちがいの著述であるのを不思議に思つて、
 それから間もなく塚原老人に会つた時に訊きくと、「大変なものを
 見附けられた。アレはネ……」と 渋柿園老人じゆうしえんは例の磊落らいらくな調
 子で、「島田の奴が馬を引張ひっぱつて来たので、仕方がないから有合ありあ
 いのものを典じて始末をつけたが、その穴埋あなうめをしなけりやなら
 ん。そこで島田が或る本屋を口説くどいたところが、数学の本を書い

てくれるなら金を出そうというので、それから島田がドコからか原書を借出して来て、二人して一週間ばかりで書上げたのがアノ本サ。早速金に換えて懐ろが温まったので、サア繰出せと二人して大豪遊を極めたところが、島田の奴はイツマデもブン流して帰ろうといわんもんだから、とうとう遣い果して復た馬を伴れて戻るといふわけサ。その時分の島田はソリヤアでれでれして尻が腐つてしまふんだからカラ始末に行かなかつた」と昔を憶出して塚原老人はカラカラと笑つた。この頃の或る新聞に、沼南が流連して馴染の女が病気で臥ている枕頭にイツマデも附添つて手厚く看護したという逸事が載っているが、沼南は心中の仕損いまでした遊蕩児であつた。が、それほど情が濃やかだつたの

で、同じ遊蕩児でも東家西家と花を摘んで転々する浮薄漢ではなかつたようだ。

沼南は本姓鈴木で、島田家の養子であつた。先夫人は養家の家いえつき

附娘だともいうし養女だともいうが、ドチラにしても若い沼南

が島田家に寄食していた時、懐おもわれて縁組した恋婿であつたそう

だ。沼南が大おおくま隈参議と進退を侶ともにし、今の次官よりも重く見ら

れた文部権ごん大書記官の栄位を弊履の如く一いっしゅう蹴きゅうして野に下り、

矢野文雄や小野梓と並んで改進黨の三りようしゅう領りょう袖として声望隆々

とした頃の先夫人は才さいぼう貌ぼう双絶の艶えんめい名なを鳴らしたもんだつた。

その頃私は番町の島田邸近く住すまつていたので、度々島田夫人と

途中で行逢ゆきあつた。今なら女優というような眩まぶしい粉ふんたい黛たいを凝らし

た島田夫人の美装は行人の眼を集中し、番町女王としての艶名は隠れなかつた。良人沼南おつとと同伴でない時はイツデモ小間使こまづかいをおとも伴につれていたが、その頃流行した前髪まえがみを切つて前額ひたいに垂たらした束髪そくはつで、嬌態しなを作つて桃色の小さいハンケチを揮り揮り香水におの香いを四辺あたりに薫くんじていた。知らないものは芸者でもなし、娘さんでもなし、官員さんの奥様らしくもなしと眼みはを睜みはつて美貌と美装みとに看惚みとれたもんだ。その時分はマダ今ほど夫婦連れ立つて歩く習慣はが流行はやらなかつたが、沼南はこの艶色しした滴したたる夫人を出来るだけ極彩色ささせて、近所の寄席よせへ連れてつたり縁日を冷かしたりした。孔雀くじやくのような夫人のこの盛粧はドコへ行つても目に着くので沼南の顔も自然に知られ、沼南夫人と解ますますつて益々夫人の艶名

が騒がれた。

九段くだんの坂下の近角ちかみじようかん常観じょうかんの説教所せつぎょうじよは本もとは藤本というこの辺での落語席であつた。或る晩、誰だかの落語を聴きに行くと、背う後しろで割れるような笑い声がした。ドコの百姓が下らぬ低級の落語に見つともない大声を出して笑うのかと、顧ふり盼かえつて見ると諸方の演説会で見覚えの島田沼南であつた。例の通りに白壁しろかべのように塗り立てた夫人とクツつき合つて、傍若無人に大きな口を開いてノベツに笑っていたが、その間夫人は沼南の肩を叩たたいたり膝ひざを揺ゆつたりして不行儀を極めているので、衆人の視線は自然と沼南夫妻に集中して高座こうざよりは沼南夫妻のイチヤツキの方に気を取られた。沼南の傍若無人の高笑いや夫人のヒツヒツと撥くすぐられるよ

うな笑いが余り耳触りになるので、「百姓、静かにしろ」と罵ば声せいを浴びせ掛けられた。

数年前物故ぶつこした細川風谷の親父の統計院幹事の細川広世が死んだ時、九段の坂上で偶然その葬列に邂逅でっくわした。その頃はマダ合あいのりぐるま

乗俵ちりょうというものがあつたが、沼南は夫人と共に一つ俵に同乗

して葬列に加わっていた。一体合乗俵ちりょうというのはその頃の川柳や都々逸どどいつの無二の材料となつたもので、狭い俵に両性がピッタリ粘着くっつ

き合つて一つ膝掛ひざかけに纏くまつた容子は余り見つともイイものではなかつた。搗かてて加えて沼南夫人の極彩色にお化粧した顔はお葬い

向きでなかつた。その上に間断なくニタニタ笑いながら沼南と喃なんなん

々私語ひそごして行く体ていたらくは柩ひつぎを見送るものを響ひんしゆく蹙しゆくせしめず

には措おかなかつた。政界の名士沼南とも知らない行人の中には目に余つて、あるいは岡おか焼やき半分に無礼な罵声を浴びせ掛けるものもあつた。

その頃は既に鹿鳴館ろくめいかんの欧化時代を過ぎていたが、欧化の余波は当時の新らしい女の運動を惹起じやつきした。沼南は当時の政界の新人の領袖りょうしゆうとして名声藉せき甚じんし、キリスト教界の名士としてもまた儕輩せいはいに推おされていたゆえ、主としてキリスト教側から起きた目覚めめざめた女の運動には沼南夫人も加わつて、夫君を背景としての勢力はオサオサ婦人界を圧していた。

丁度巖いわもと本善治よしはるの明治女学校が創立された時代で、教会の奥に隠れたキリスト教婦人が街頭に出でて活動し初めた。九十の老

齡で今なお病を養いつつ女の頭領として仰がれる矢島楯子やじまかじことじ刀自を
 初め今は疾とつくに鬼籍に入った木村鐙子夫人とうこや中島湘烟夫人なかじましようえんは
 皆当時に崛起くつきした。国木田独歩くにきだどつぽを恋に泣かせ、有島武郎ありしまたけおの小説
 に描かれた佐々木のぶ子の母の豊寿夫人とよじゆはその頃のチャキチャ
 キであつた。沼南夫人はまた実にその頃の若い新らしい側を代表
 する花形であつた。

今日けふの女の運動は社交の一つであつて、貴婦人階級は勿論だが、
 中産以下、プロ階級の女の集まりでもとにかくに着物やおつくりの
 競争場になりがちであるが、その頃のキリスト教婦人は今の普通
 の婦人は勿論、教会婦人と比べても数段ピューリタニツクであつ
 て、若い婦人の集りでも喪に包まれたようで色彩に乏しかつた。

その中で沼南夫人は百舌もがらすや鴉からすの中のインコのように美しく飾り立てて脂粉と色彩の空気を漂わしていた。

この五色で満身を飾り立ったインコ夫人が後に沼南の外遊不在中、沼南の名誉に泥を塗ったのは当時の新聞の三面種ともなったので誰も知ってる。今日これを繰返しても決して沼南の徳を累する事はあるまい。徳を累するどころか、この家庭の破綻はたんを処理した沼南の善後策は恐らく沼南の一生を通ずる美德の最高発現であったらう。

五

沼南のインコ夫人の極彩色は番町界限や基キリスト督教界で誰知らぬものはなかつた。羽子板はごいたの押絵が抜け出したように余り目に立ち過ぎたので、鈍色にぶいろを女徳の看板とする教徒の間には顰蹙するものもあつた。欧化気分がマダ残っていたとはいへ、沼南がこの極彩色の夫人と衆人環視の中でさえも 綯ちゆうびゆう 繆てんめん 纏てんめん 綿めんするのを苦笑して窃ひそかに沼南の名誉のため危あやぶむものもあつた。果然、沼南が外遊の途に上つてマダ半年と経たない中に余り面白くない噂がポツポツ聞えて来た。アアいう人目ひとめに着く粧よそおいの婦人に対してはとかくにあらぬ評判をしたがるもんだから、我々は沼南夫人に顰蹙しながらも余りに耳を傾けなかつた。が、沼南の帰朝が近くなるに従つて次第に風評が露骨になつて、二、三の新聞の三面に臭わさ

れるようになった。

その頃沼南の玄関にYという書生がいた。文学志望で夙はやくから私の家に入居していた。沼南が外遊してからは書生の雑用ひまが閑ひまになったからといって、殊にシゲシゲと遊びに来た。写字をしたり口授を筆記したりして私の仕事の手伝いをしていた。面胞にきびだらけの小汚こぎたない醜ぶおとしこ男で、口は重く気は利かず、文学志望だけに能書というほどではないが筆札だけは上手じょうずであったが、その外には才も働きもない朴念人ぼくねんじんであった。

沼南が帰朝してから間もなくだった。Yは私の仕事の手伝いをしに大抵毎日、朝から来ては晩まで殆ほとんど一日を私の家で過すごした。或る時、「ちよつと故郷くにへ帰りますから今日ぎり暫らくお

暇いただを戴いたきたい」といった。

余り突然だったので、故郷くにに急な用事でも出来たかと訊きくと、脚気かっけだといった。ソナけぶりナ気振はそれまでなかつたのだから嘘うそとは思ったが、その日ぎりで来なくなつてしまった。

それから二、三日過ぎて、偶然沼南夫妻の在籍する教会の牧師のU氏を尋ねると、U氏はちよつとした咄はなしの途切れに、「Yはこの頃君のところへ行くかい？」といった。

「二、三日前に来て近々故郷くにへ帰るといつてました。」

「その他ほかに一身上の咄は何もしなかつたかい？」

「イヤ、何にも。」

「困つたよ、」U氏は首を掉ふつて一ひと言こといつたぎり顔を顰しかめて固

くちびる
唇を結んでしまった。

「Yがドウかしましたか？」

「困ったよ、」と、U氏は両手で頭を抱えて首を掉り掉り苦しもうに髪の毛を掻き揉った。「君はYから何も聞かなかったかい？」

「何にも聞きません。」

「こんな弱った事はない、」と、U氏は復た暫らく黙してしまつた。やがて、「君は島田のワイフの咄を何処かで聞いたろう？」

「どんな話をです？」と、氏の問が能く吞込めないので訊き返したが、その時偶つと胸に浮んだのは沼南外遊中からの夫人の芳ばしからぬ噂であつた。ツイその数日前の或る新聞にも、「開国始末」で冤を雪がれた井伊直弼の亡霊がお礼心に沼南夫人の孤閨の

無聊ぶりようを慰めに夜な夜な通うというようなくす撥ぐつたい記事が載っていた。今なら女優を想おもわしめるジャラクラした沼南夫人が長い留守中の孤独に堪えられなかったというは、さもありそうな気もするが、マサカに世間で評判するようなソナふしだら不品行もあるまいと、U氏の島田のワイフの咄というのが何とも計りかねてU氏の口の開くのを待っていると、

「君も薄々知ってるだろうが、島田のワイフが飛んでもない不品行をやつてネ……」

私はハツとした。予期した事が実現されたようでもあるし、自分の疑心で迎えてU氏の言葉を間違えたようにも思つて、「ホントウですか、」と反問すると、

「ホントウとも、ホントウとも、」とU氏は早口に點頭うなずいて、

「ホントウだから困こつてしまった。」

U氏が最初からの口吻くちふりではYがこの事件に関係があるらしいので、Yが夫人の道みちに外はずれた恋の取持ちでもした乎か、あるいは逢あいびきいびき曳ひの使いか手紙の取次とりでもしたかと早合点はやがてんして、

「それじゃアYが夫人の逢曳あひひのお使いでもしたんですか？」とい
うと、

「そんな幫助罪ほうじよざいならマダ軽いが、不品行あいての対手たいての本人ほんにんなんだ。」
「えッ？」と私はまるで狐きつねに魅つまれたような気がした。

沼南夫人のジヤラクラした姿態なりふりや極彩色の化粧を一度でも見
た人は貞操あしだが足駄はを穿はいて玉乗たまのりをするよりも危あぶなツかしいのを

誰でも感ずるだろう。が、世界の美人を一人で背負つて立つたツモリの美貌自慢の夫人が扱りに扱つて面胞だらけの不男のYを相手に恋の綱渡りをしようとは誰が想像しよう。孔雀が豚を道連れにするエソップにでもありそうな図が憶出された。

「あの奥さんがYと？」と私は何度も何度も一つ事を繰返して「そうだよ、ホントウだよ」とU氏に何度もいわれても自分の耳を疑わずにはいられなかつた。

六

駿馬痴漢しゅんばちかんを乗せて走るといふが、それにしてもアノ美貌を誇

る孔雀夫人が扱りに扱ってにきびづら面胞面の不男を相手にするとは余り物好き過ぎる。尤も一と頃ロンドン倫敦の社交夫人間にカメレオンをし鍾ようあい愛よする流行があつたというが、カメレオンの名みようだい代だいならYにも勤まる。

そういえばYの衣服みなりが近来著るしくぜいたく贅ぜ沢たくになつて来た。新したて裁おろ下おろしのセルの单衣ひとえに大巾おおはちりめん縮お緬おの兵児帯へこおびをグルグル巻きつけたこの頃のYの服装は玄関番の書生としては分に過ぎていた。奥さんから貰もらつたと自慢そうに見せた繡ぬいづぶしの紙かみいれ入いれも書生にくれる品じゃない。疑えば疑われる事もまるきりないじゃないやなかつたが、あのモズモズした無愛想な男、シカモ女に縁つばめのなさそうな薄うすぎた汚つらない面をした男が沼南夫人の若い燕つばめになろうとは夢にも

思わなかつたから、夫人の芳ばしくない噂を薄々小耳こみみに入れても Y などはテンから問題としなかつた。

「女が悪いんだ。女の方から持掛もちかけたんだ、」と U 氏は 洩じゅうめん面めんを作つて苦にがにが々ががしい微笑を唇くちもと辺へに寄せつつ、「あの女は先天的

に墮落の要素を持つてる。僕は裁判をしてこつちが羞恥しゅうちを感じて赤面したが、女はシヤアシヤアしたもんで、平気でベラベラ白状した。職業的墮落婦人よりは一層厚顔だ。口の先では濟まない事をした、申訳がありませんといったが、腹の底では何を思つてるか知れたもんじやない。良心がまるで曇つてる。」

「Y も平気でしたか？」

「イヤ、Y は小さくなつて悄しおれ返つていた。アレは誘惑しゆわくされたん

だ、オモチヤにされたんだ。」

と、U氏はYの悔^{かいしゆん}悛^{しん}に多少の同情を寄せていたが、それには
 違いなくとも主人なり恩師なりの眼を掠^{かす}めてその最愛の夫人の道
 ならぬ遊戯のオモチヤになったYの破廉恥を私は憤らずにはいら
 れなかつた。Yは私の門生でも何でもなかつた。が、日^{につ}夕^{せき}親し
 く出入してただけに私までが馬鹿にされたような不快を感じた。
 「Yはマダ人間が出来ておらんから直^すぐ誘惑される。チンコロの
 ようにオモチヤにされたんで罪を犯^りす了^り簡^{けん}があつたんじやな
 い。島田の許へ連れてつて詫^{あや}まらせたが、オイオイ声を揚げて泣
 き出した。」

U氏がコンナ事でYを免^{ゆる}すような口^{くちぶり}吻^{ぶん}があるのが私には齒^は痒^{がゆ}

かつた。Yは果してU氏の思うように腹の底から悔^{くい}懊^{あらた}めたであるう乎。この騒^{さわ}ぎが持^{もち}上^{あが}つてる最中でもYは平気な顔をして私の家へ来て仕事の手伝いをしていた。沼南と私とは親しい知り合いでなかつたにしろ、沼南夫妻の属するU氏の教会と私とは何の交渉がなかつたにしろ、良心が働いたなら神の名を以てする罪の裁きを受ける日にノメノメ恥を包んで私の前へは出て来られないはずであるのを、サモ天地に恥じない公明正大の人であるかのような平気な顔をして私の前に現れた。これが神を畏^{おそ}れ罪を恥じて悔懊めた人であろう乎。

U氏もYの罪を免しつつもその態度にはマダ慊^{あきた}らないものがあつたのであろう。「君には何にも話さなかつたかい？ 変つた素^そ

振ぶりは見えなかつたかい？」といった。

「そんな不名誉な話は無論する氣遣いはありませんが、シカシ妙だと思ひましたよ、二、三日前に来た時急に国へ歸るつてましたから。」

「それは君、島田が歸らせるんだよ。島田には実に感服したよ。」

Yがオイオイ声を出して泣いて詫まつた時にダネ。人間てものは誰でも誤つて邪路に踏ふみまよ迷う事があるが、心から悔悛めれば罪は奇麗ぬぐに拭い去られると懇々説諭して、俺おれはお前に顔へ泥を塗られたからつて一端の過失のために前途にドンナ光明が待つてるかも解らないお前の一生を葬つてしまいたくない。なお更これから先きも手許てもとに置いて面倒を見てやりたいが、それでは世間が承知し

ない。俺は決してお前を憎むのではないが暫らく余焰ほとぼりの冷めるまで故郷へ帰つて謹慎していてももらいたいといつて、旅費その他の纏まとまった手当をくれた。その外に、修養のための書籍を二、三十冊わざわざ自分で買つて来てYの退先のきさきへ届けてくれたそうだ。普通の常識では豪えらいか馬鹿かちよつと判断が出来ないが、左とに右かく島田は普通の人間の出来ない事をするよ——」

「それにはYも心から感謝して、その話を僕にした時ポロポロ涙を滲こぼして島田の恩を一生忘れないと泣いていた、」とU氏は暫らくしてから再び言葉を続け、「が、Yはマダ人間が出来ておらんから、恩に感ずる事も早い。君ももしYに会つたら能く訓よ誡くんかいしてやってくれ給え。二度と再び島田に裏切

るような不品行をしたなら、最^もう世の中へ出て来られない。一生の廃^{すた}れ者になつてしまふ。」

七

その頃私はマダ沼南と交際がなかつた。沼南の味も率^{そつ}気もない
 実^みなし汁^じのような政治論には余り感服しなかつた上に、其^{そこ}処^{ここ}
 で見掛けた夫人の颯^{さつ}感^{かん}すべき娼^{わう}婦^ふ的^{てき}媚^び態^{たい}が妨^さげをして、沼南に対
 してもまた余りイイ感じを持たないで、敬意を払^はう気になれな
 かつた。

が、この不しだらな夫人のために泥を塗られても少しも平時の

沈着を喪わ^{うしな}ないで穩便^{おんびん}に済まし、恩を仇^{あだ}で報ゆるに等しいYの不埒^{ふらち}をさえも寛容して、諄^{じゆん}々^{じゆん}と訓誡した上に帰国の旅費まで恵み、あまつさえ自分に罪を犯した不義者を心から悔^く悛^いめさせるための修養書を買つて与えたという沼南の大雅量は普通人には真^ま似^ねても出来ない襟度^{きんど}だと心から嘆服した。

「全く君子だ。古聖賢に恥じない徳人だ、」とそれまで沼南に対して抱いた誤解を一掃して、世間尋常政治家には容易^{ひつ}に匹^{ひつ}を求めがたい沼南の人格を深く感嘆した。

それにしてもYを心から悔^せ悛^せめさせて、切^せめては世間^{せけん}並^{なみ}の真^ま人間^{にんげん}にしなければ沼南の高誼^{こうぎ}に対して済まぬから、年長者の義務^むとして門生でも何でもなくとも日頃親しく出入^{ゆかり}する由縁^{ゆかり}から

十分訓誡して目を覚まさせてやろうと思ひ、一つはYを四角四面の謹嚴一方の青年と信じ切らないまでも恩人の顔に泥を塗る不義な人間とも思わなかつたのが裏切られたイマイマしさから思うさま油を搾しぼつてやろうとYの来るのを待まち構かまえていた。が、二、三日経つても何の沙汰もないので、葉書を出して呼寄せたが、返事も来なければ終ついに顔も見せなかつた。

二ヶ月ほどして国元から手紙を遣よこしたが、紋切形の無沙汰見舞であつた。半歳ほどして上京したが、その時もいずれ参上するといふ手紙を遣しただけでやはり顔を見せなかつた。U氏から後に聞くと、U氏が私にYの話をした翌あくる日に、帰国の前にモ一度私の許へ行けといつたそうで、YはU氏が私に秘密を話したのを悟

って、キマリが悪くて来られなかったらしい。

Yはその後も度々故郷へ行ったり上京したりしたが、傷持つ足の^{おの}自^{しきい}ずと鬩^いが高くなって、いつも手紙をよこすだけでそれぎり私^いの家へは寄り附かなくなった。が、手紙で知らして来た容子^よに由ると、その後も続いて沼南の世話になっていたらしく、中国辺の新聞記者となったのも沼南の^{くちいれ}口入なら、最後に脚気か何かの病気でドコかの病院に入院して終に死んでしまった病院費用から死後の始末まで万端皆沼南が世話をしてやったのだそうだ。

私が沼南と^{こころやす}心易^{やす}くなつたはその後であつた。Yが私の家へ^{でいり}出入していたのを沼南は能^よく知っていたが、私も沼南もYの名は一度でも^{おくび}噤にも出さなかつた。

沼南の先夫人の不しだらは当時二、三の新聞の三面を賑にぎわしたから誰も知っている。が、不義の対あいて手の忘恩者を赦ゆるした沼南の大雅量は直接事件に交渉したものの外は余り知らない。使用人同様の玄関番の書生の身分で主人なり恩師なりの眼を窃ぬすんでその名譽に泥を塗るいおうようない忘恩の非行者を当の被害者として啻ただに寛容するばかりでなく、若わかげの一端の過失のために終生を埋もらせたくないと訓誡もし、生活の道まで心配して死ぬまで面倒を見てやったというは世間に余り例を聞かない何という美談であろう。中には沼南が顔に泥を塗られた見にくさを箔はくでゴマカそうとするためのお化粧的偽善だというものもあるが、偽善でも何でも忘恩の非行者に対してこういう寛容な襟度を示したものは滅多にない。

沼南にはその後段々近接し、沼南門下のものからも度々噂を聞いて、Yに対する沼南の情誼に感奮した最初の推服を次第に減じたが、沼南の百の欠点を知つても自分の顔へ泥を塗つた門生の罪過を憎む代りに憐あわれんで生涯面倒を見てやつた沼南の美德に対する感嘆は毫ごうも減へずるものではない。が、有ありてい体にいうと沼南は度量海あわの如き大人格でも、清濁併あわせ呑のむ大腹中あわでもなかつた。それよりはむしろ小悪微罪いさぎよに触れるさえ忍び得られないで独りを潔いさぎようする潔癖家であつた。濁流うずまの渦うずま巻く政界から次第に孤立して終にピユーリタニツクの使命ひつきように潜かくれるようになったは畢ひつきよう 竟ひつきようこの潔癖のためであつた。が、ドウしてYに対してのみ寛大であつたらう。U氏は「沼南は不可解だ、神乎か愚人乎」とその後しばしば私に話

したが、私にも実はマダ謎なぞである。

沼南が議政壇に最後の光焰こうえんを放ったのはシーメンス事件を弾だ

劾んがいした大演説であつた。沼南の直截ちよくせつ痛烈な長広舌はこの種

の弾劾演説に掛けては近代政治界の第一人者であつた。不義を憎

む事蛇蝎だかつよりも甚はなはだしく、悪政暴吏に対しては挺身搏闘はくとうして滅

ぼさざれば止まなかつた沼南は孤高清節を全うした一代の潔士で

もありまた闘士でもあつた。が、沼南の清節は縵袍弊袴うんぼうへいこで怒号

した田中正造たなかししょうぞうの操守と違つてかなり有福な贅沢な清貧であつ

た。沼南社長時代の毎日新聞社員は貧乏が通り相場である新聞記

者中でも殊に抽ぬきんでて貧乏であつた。毎月の月給が晦日みそかの晩にな

つても集金人が金を持って帰るまでは支払えなくて、九時過ぎま

でも社員が待たされた事が珍らしくなかつた。随したがつて社員は月末の米屋酒屋の勘定どころか煙草錢にもしばしば差支さしつかえた。が、社長沼南は位置相当の門戸を構える必要があつたとはいへ、堂々たる生活をしながら社員が急を訴えても空々そらぞらしい貧乏咄をしてテンから相談對手にならなかつた。

沼南はまた晩年を風紀の廓清かくせいに捧ささげて東奔西走廢娼禁酒を侃か々んかんするに寧ねいじつ日なかつた。が、壮年の沼南は廢娼よりはむしろ拜娼で艶名隠れもなかつた。が、その頃は紅倚翠わいこういすいを風流として道德上の問題としなかつた。忠孝の結晶として神に祀まつられる乃の木將軍ぎさえ若い頃には盛んに柳暗花明の巷ちまたに馬つなを繫つないだ事があるので、若い沼南が流連荒亡した半面の消息を剔てつけつ抉けつしても毫も沼

南の徳を傷つける事はないだろう。沼南はウソが嫌いであった。

「私はウソをいった事がない」と沼南自身の口ずから聞いたのは数回に留とどまらない。瑜ゆ瑕か並なび覆おわおざる赤裸々の沼南のありのままを正直に語るのは、沼南を唐とう偏へん木ぼくのピューリタンとして偶像扱あいするよりも苔下の沼南は微笑を含んでかえって満足するであろう。

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「読売新聞」

1923（大正12）年11月30日～12月6日号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三十年前の島田沼南

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>